

フェスティバルトーキー実行委員会		
顧問	野村 萬	公益社団法人日本芸能実演家団体協議会 会長・能楽師
	福原義春	株式会社資生堂 名誉会長
名誉実行委員長	高野之次	豊島区長
賞賛委員長	森田 広	アサヒグループホールディングス株式会社 相談役
副委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
	栗原 直	豊島区文化商工部長
	東澤 昭	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事／事務局長
委員	岡田恭子	株式会社資生堂企業文化部長
	尾崎元規	公益社団法人企業メセナ協議会 理事長・花王株式会社 顧問
	熊倉純子	東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科 教授
	小沼克年	アサヒビール株式会社社会環境部 部長
	鈴木正美	東京商工会議所豊島支部 会長
	扇田昭彦	演劇評論家
	永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター 会長
	小澤弘一	豊島区文化商工部文化デザイン課長
	岸 正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	小島寛大	NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 理事
監事	鈴木さよ子	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登(骨董通り法律事務所)	

ディレクターズコミッティ	
代表	市村作知雄
副代表	小島寛大
メンバー	楢松祐子、河合千佳、喜友名織江、長原理江、横堀広彦

フェスティバルトーキー実行委員会事務局	
事務局チーフ	蓮原円花
制作	小島寛大、楢松祐子、河合千佳、喜友名織江、高橋マミ、十万垂紀子、松嶋瑞香、荒川真由子、横堀広彦、小山ひとみ、砂川史織、松宮俊文、堀江真利恵、横井貴子
広報	楢江紗史、湯川裕子
企画営業	長原理江
興券	渡邊絵里、穴戸 円
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
事務局アシスタント	平田幸来
経理	堤 久美子
総務	蓮池奈緒子、一色壽好、横川京子

技術監督	寅川英司
技術監督アシスタント	加藤由紀子
照明コーディネーター	佐々木真喜子(株式会社ファクター)
音響コーディネーター	相川 益(有限会社サウンドウィーズ)
アートディレクション&デザイン	河村康輔
メインビジュアル	二階謙ヲシ(SHOHEI×河村康輔)
ウェブ사이트	濱田真一+番松+菅原直也(株式会社ロフトワーク)
海外広報・翻訳	アンリ ユーズ・ウィリアム
物販	渡辺 淳
執筆・当日パンフレット編集	鈴木理映子

アジアシリーズ・プログラミング	李 丞孝
シュリンゲンジーフ特集 企画・コーディネート	ウルリケ・クラウトハイム

主催：フェスティバルトーキー実行委員会、豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター
アジアシリーズ共催：独立行政法人国際交流基金（国際交流基金 東アジア共同制作シリーズ vol.2）
協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂
後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）、J-WAVE 81.3FM
特別協力：西武池袋本店、東京百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、デパート株式会社
協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファ池袋まちづくり、ホテルメトロポリタン、ホテルグランドシティ、池袋ホテル会
宣伝協力：株式会社ポスター・ハリス・カンパニー

アーツカウンシル東京	フェスティバル助成
	(公益財団法人東京都歴史文化財団)

平成28年度 文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ (池袋/としま/東京アーツプロジェクト 事業)

公益社団法人企業メセナ協議会　2021 芸術・文化による社会創造ファンド 採択事業

フェスティバルトーキー14は東京クリエイティブウィークスと広報連携しています。

会期：2014年11月1日(土)～11月30日(日)

インター・阿部佑加、入江都美、岡崎由美子、加藤希美、加藤彩、神永真美、川村知也、北村未来、木田みのり、佐藤隆輔、清水千奈美、杉本真理江、田中秀樹、田中紗織、田中直子、遠山高江、中村みなみ、萩原千亜紀、橋本萌、針谷慧、平石直輝、福地紗綾、三羊乃乃、山下登紀子、山口将輝、吉原早紀

ETワルニ：青柳佐代子、秋元エマ、阿久根夕佳、朝倉知世、浅川喜子、熱田明美、阿部敦子、荒井純奈、新井朋行、有本裕美子、安藤香里、五十嵐未来、井口真帆、井手上紗織、今川涼香、上野智美、榎悠里、大塚春、大迎美希、大出晴、小川真穂子、小山内梓香、小野寺ありす、畑田みずき、加藤千夏、片山悠太郎、桂星穂子、加藤真帆、菅野沙和子、北原七海、児嶋祐佳、小林惠理子、境田博美、佐川逢妃、崎津梨菜、福原紗織、島根悠子、霜鳥桜子、鈴木南、間島弥生、高橋志緒、高松章子、田中正雄、民谷絵美子、津田貴生、照沼静香、渡並航、富永愛香、中俣恵美、中川朋子、中村光樹、中村光子、中村光子、根本明美、波田野子乃、峰谷翔子、林ひかり、平野桃里、胡瀬、藤田さおり、富士原和代、又村実穂、三ツ木孝輔、松永愛子、宮川学、宮内隆生、森田祐香、山口侑紀、四浦麻希、吉田美幸、四方田清子、跡見学園女子大学 曾田ゼミシンカワゼミ

							
豊島区 TOSHIMA CITY	公益財団法人 としま未来文化財団	ANJ NPO法人アートネットワーク・ジャパン Arts Network Japan	JAPAN FOUNDATION 国際交流基金	Asahi アサヒビール株式会社	SHI/EIDO	ARTS COUNCIL TOKYO	

発行：フェスティバルトーキー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしがも創造舎 TEL:03-5961-5202 http://festival-tokyo.jp/
編集：鈴木理映子、フェスティバルトーキー実行委員会 デザイン：小林 剛（UNA） ※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。 禁無断転載

Festival/Tokyo Executive Committee	
Advisors: Man Nomura, Chairman, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations, Noh Actor Yoshiharu Fukuhara, Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd	
Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City	
Chair of the Executive Committee: Hitoshi Ogita, Adviser to Board, Asahi Group Holdings, Ltd.	
Vice Chair of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Director, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)	
Akira Kurihara, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City	
Akira Touzawa, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation	
Committee Members: Kyoko Okada, General Manager, Corporate Culture Department, Shiseido Co., Ltd.	
Motoki Ozaki, President, Association for Corporate Support of the Arts, Corporate Advisor, Kao Corporation	
Sumiko Kumakura, Professor, Department of Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts	
Katsutoshi Konuma, General Manager, Social & Environmental Department, Asahi Breweries, Ltd.	
Masami Suzuki, Chairman, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima	
Akihiko Senda, Theatre Critic	
Taeko Nagai, Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)	
Kouichi Ozawa, Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City, Director of Cultural Design Section	
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation	
Naoko Hasuike, Representative, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)	
Hiroto mo Kojima, Board Member, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)	
Supervisor: Sayoko Suzuki, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City	
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)	

Directors Committee	
Representative: Sachio Ichimura	
Deputy Representative: Hiroto mo Kojima	
Members: Yuko Uematsu, Chika Kawai, Oriie Kiyuna, Rie Nagahara, Masahiko Yokobori	

Executive Committee Office	
Administrative Manager: Madoka Ashihara	
Production Co-ordinators: Hirotomo Kojima, Yuko Uematsu, Chika Kawai, Oriie Kiyuna, Mami Takahashi, Akiko Juman, Luna Matsushima, Mayuko Arakawa, Masahiko Yokobori, Hitomi Oyama, Shiori Sunagawa, Toshifumi Matsumiya, Marie Moriyama, Takako Yokoi	
Sales & Planning: Rie Nagahara	
Ticket Administration: Eri Watanabe, Tsubura Shishido	
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato	
Office Assistant: Saki Hirata	
Accounting: Kumiko Tsutsumi	
Administrators: Naoko Hasuike, Hisayoshi Isshiki, Kyoko Yokokawa	

Technical Director: Eiji Torakawa	
Assistant Technical Director: Yukiko Kato	
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)	
Sound Co-ordination: Akira Akawa (Sound Weeds Inc.)	
Art Direction & Design: Kosuke Kawamura	
Main Graphic Design: Satoshi Nikaicho (SHOHEI x Kosuke Kawamura)	
Website: Shinichi Hamada + Yu Shigematsu + Naoya Sugawara (loftwork Inc.)	
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews	
Merchandise: Jun Watanabe	
Writing, Performance Leaflet Editing: Rieko Suzuki	

Asia Series Programing: Seunghyo Lee	
Schlingensief Film Series Programing: Ulrike Krautheim	

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee, Toshima City, Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)	
Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)	
Asia Series co-produced by the Japan Foundation (The Japan Foundation East Asian Collaboration Vol.2)	
Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.	
Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO, Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), J-WAVE 81.3FM	
Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City Corporation, Chaocott Co., Ltd.	
In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Ikebukuro Hotel Association	
PR Support: Poster Hari's Company	
Supported by Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)	
Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2014 (Ikebukuro/Toshima/Tokyo Arts Project Enterprises)	
Supported by Association for Corporate Support of the Arts, Japan (2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture)	
Publicity Partner: Tokyo Creative Weeks	

Period: November 1 (Sat) to November 30 (Sun), 2014

春の祭典

白神ももこ (演出・振付) ×毛利悠子 (美術) ×宮内康乃 (音楽)

11/12 (Web) – 11/16 (Sun)
東京芸術劇場 プレイハウス
Tokyo Metropolitan Theatre, Playhouse
白神ももこ (演出・振付) ×毛利悠子 (美術) ×宮内康乃 (音楽)



© Masumi Kawamura

The Rite of Spring

Momoko Shiraga (Direction, Choreography) +

Yuko Mohri (Stage Design) +

Yasuno Miyachusi (Music) [Japan]

ストラヴィンスキー作曲『春の祭典』 ——春を葬る祭り

鴻英良（演劇批評家）

いったいどこからこのような力が生み出されてくるのか。ロシア人の音楽家ストラヴィンスキーが作曲したバレエ『春の祭典』（1913年、パリ初演）を観た人の多くがそう問い、身のうちに呼び起こされた自らの感動をそのように伝えてきた。このダンス／バレエが生み出す爆発的な力は、ロシアでは自然の本源的な力、スチヒーヤと呼ばれるものだ。それは谷間を吹きさすぶ風のように、われわれを内側からも突き動かす何ものかであり、人間の生命力の根源にあるものとされている。『春の祭典』において、われわれ観客はその力の具現化された姿に接し、それと共振するのである。『春の祭典』の魅力がそこにあることは間違いない。

しかし、ここで演じられている祭りが、いつ、つまり何月何日、何のために、どのような形で行われているのかご存知ですかと問われたとき、あなたはその問いにどこまで答えることが出来るだろうか。

*

1986年、国立劇場に、ピナ・バウシュとブッパダール舞踊団の来日公演『春の祭典』を観に行った私もその儀礼的に圧倒されてしまったのだが、その数日後、ピナ・バウシュは私に「これは儀礼ではありません。儀礼についてのダンスなのです」と語ったのだ。さらに、「ここで重要なのは、犠牲に捧げられているのが男性ではなく、女性だということです」と言ったのである。

私はこれらの言葉に衝撃を受け、『春の祭典』について改めて調査を開始した。すると、意外な事実が浮かび上がってきた。それはわれわれがバレエ／ダンス『春の祭典』で目撃しているあの儀礼はヤリー口の祭りと言って、春を葬る祭りなのではなく、スラブで行われている春を葬る祭りだったということである。つまりこれはたとえば春

の訪れを告げるフィレンツェのウフィツィ美術館にあるポッティチェリの絵『春（ラ・プリマヴェーラ）』とは全く異なるシチュエーションを描いた作品だということになる。このことは作品の制作者たち、たとえば上演台本を書き、舞台装飾を担当したニコライ・リョーリヒ、バリ公演を組織したセルゲイ・ディアギレフ、作曲のストラヴィンスキーらによってはっきりと意識されていた。

1913年の早い時期に（初演は同年の5月29日）、上演台本を担当したリョーリヒはディアギレフに次のように書き送った。少し長くなるが部分的に引用しよう。

「ストラヴィンスキーとともにわれわれが構想したバレエ《Sacre du Printemps》で私が伝えたかったのは、スラブ的な意味での大地の喜びと天界の勝利の姿です。第1景『大地への口づけ』は、春遊びのためにスラブの民たちが集まってきた緑したたる草原のなかの聖なる丘の麓へとわれわれを導いていきます。ここには魔女たちがいる。略奪結婚ごっこがあったりもする。そして最後に最も重要な瞬間がやって来るのです。村から長老が連れてこられて花咲き乱れはじめる大地に口づけをさせられるのです。この秘蹟の時に天才的なニジンスキーは神秘的な恐怖を素晴らしく様式化して踊ったのです。

この明るい地上の喜びの後で、つまり、第2景において、われわれは天上の神秘へと向かうのです。乙女たちが聖なる丘の禁断の石に取り囲まれたなかで聖なる遊戯に耽りながら、偉大なものとされることになる選ばれた犠牲を選ぼうとしているのです。そして選ばれるその乙女はまさにいま最後の踊りを踊るのです。そしてこの踊りの目撃者は、熊の毛皮を羽織った長老たちであり、そこでは熊

は始祖であると考えられていたのです。長老たちは太陽の神ヤリー口に犠牲を捧げるのです」改めて問わなければならない。なぜヤリー口に犠牲として捧げられるのが選ばれた乙女でなければならないのか。そのことを問題化しようとしたのがピナ・バウシュだった。『春の祭典』を見るわれわれはそのことを考えなければならない。

私はそのことを考えるためのヒントとなるのではないのかと思えるヤリー口の祭りの実態についてここで書いておいてみたいと思う。『春の祭典』の台本を書いたリョーリヒは、1910年の秋、次のように書いている。

「この新しいバレエが提示するのは古代スラブの聖なる夜の連続の光景です……。舞台が始まるのは夏の夜で、それは日が差し込みはじめる日の出とともに終わりを迎えるのです。ダンスの振り付けということで言えば、これはまさに、儀礼的な舞踊の中に集約されるのです。この作品は、いわゆる劇的展開なしに、古代ロシアを呼び起こそうとする最初の作品となるでしょう」

こうしてわれわれはひとつの事実に辿りつこうとしている。実際、これは夏の夜に起こっている出来事なのである。実は、日にちすら特定できる。アフナーシェフの『スラブ人の詩的自然観』に詳しく書かれていることだが、春が去り、夏が来る6月24日の夜の話なのだ（地域によっては、別の日のこともあるが、少なくとも、春の訪れを告げる4月や5月の話ではない）。

その日の夜、一人の乙女が選ばれ、《春》を体現するものとして、夏の神《ヤリー口》に犠牲として捧げられなければならない。撒いた種が芽を吹く春、それが実りの秋になるためには夏が来なくてはならない。そのためには春は葬り去られねばなら

ない。そのための儀礼として行われていたのがヤリー口の祭りだったのである。それをモデルとして作られた『春の祭典』、この作品のロシア語原タイトルは、直訳すると、実は、『聖なるものとされた春』なのである。なぜ、春が聖なるものとされなければならないのか。犠牲として捧げられるものとされるためにはそれは聖なるものにされなければならないと考える思考があるからだ。

長老たちが聖なるものとしての春が選ばれるときを見守るであろう。ここにジェンダー問題を考えたのがピナ・バウシュであった。春を女性として描いたポッティチェリを意識していたかどうかは分からないが、それを追放する儀礼としてのヤリー口の祭りを、春を葬り去るための祭りとしてバレエにしたディアギレフ・バレエの人々が何を考えてこの作品を作ったのか、このことに肉薄しようとする形で、『春の祭典』を上演しようという人たちがいるのだという。その成果はいかに。本当に楽しみである。

近未来日本の聖なる一夜 —いけにえと再生の舞踊

白神ももこ・毛利悠子・宮内康乃 インタビュー



20世紀の傑作『春の祭典』へのアプローチ

白神 多くの振付家が取り組んできたこの大作は、自分から一番縁遠いものだと思っていたし、まさか自分がやることになるとは思っていなかったの、お話をいただいたときは正直驚きました。でも、何度も意識していろんな演奏を聴いて、楽譜上では複雑に書かれたリズムに対しても、例えば、歌舞伎や義太夫の「はっ!」「んっ!」「おっ!」という息を詰めてから足をドンと鳴らす感じとか、一本締め「よーっ、ボン!」とか、ああいった日本人の動きからでる自然なリズム感でアプローチできるのではないかと思ったんです。

『春の祭典』の録音は数々ありますが、今回、初演当時の音色をその当時の楽器で再現したフランソワ＝グザヴィエ・ロト指揮レ・シエクルの演奏を選んでます。初演のニジンスキー版の再現映像(ヴァレリー・ゲルギエフ指揮マリインスキー劇場管弦楽団&バレエ団、2008年)を観て、101年前にバリで初演された当時のことを思うと、やっぱりニジンスキーは悲壮ないけにえの物語を作ろうとしたのではなくて、楽しくて面白いエンターテインメ

ントを作ろうとしたのではないかと思いました。現在日本で日常生活を送っている私は、日本の伝統的な所作や踊りを、まるで外国人がそれを見ているかのようにフィクション的に捉えてしまうことがあります。でも、そのことこそ、ニジンスキーが『春の祭典』でやった「ロシアの田舎にあったかもしれないお祭りの再構成」と通じるものがあると考えて、この舞台を「近未来の日本にあるかもしれない架空のお祭り」として表現したいと思いました。

毛利 クリエーションの初期段階で、白神さんの「近未来の日本」のイメージが、「都市鉱山」という私の最近のテーマに結びつきました。ゴミとして不要になったモノが現在都市に生活する人間にとっては重要なインフラになっているという現実から、このことをテーマに舞台美術を構成したいと考えました。私にとって今回が初めての舞台美術への挑戦となるのですが、やはり私も初演の舞台美術を担った画家ニコライ・リョーリヒと同じく、山をつくりました。ただ、ユーラシア大陸の緑豊かな山ではなく、私の山はゴミの山になったのですが……(笑)。

宮内 『春の祭典』の音楽は大好きなのですが、今

回改めて事前に聴き込むことはしなかったんです。この音楽そのものに対して何かすることは考えませんでした。それよりも、この作品の根源的なテーマ、人間と自然界の交信というか、大地から湧き上がってくるエネルギーによって人間の営みが力強くあるということを押えて、それに対して自分なりの表現をしたいと考えました。

被災地跡と埋め立て地の光景

毛利 舞台に広がる傾斜は、自然界が作り出したフォルムはないんです。ショベルカーやトラクターによって作られるなだらかな坂のフォルムで、白神さんと見学したゴミの埋め立て地(東京23区から集まる不燃ゴミ、粗大ゴミを処理する中防処理施設)と、南相馬や石巻の沈下した土地を埋め立てる風景をイメージしています。

白神 南相馬の津波で流された土地は、原発の危険区域で、人間が入れないから、まっさらになったところに新しく草が茂っていて。その上に船が乗り上げている光景を見たときに、悲惨なことが起きたという事実を加味しなければ、私にはそれがとても美しい綺麗な場所、ファンタジーのような土地に見えてきました。また、それは埋め立て地の光景とも似ていたのです。そこでは、土に還らないビニール袋だけがゴミの山の表面に浮き出ている、花が咲いているようにはためいていて、想像以上に綺麗な光景でした。

毛利 舞台は少ない要素で構成された最高に美しい空間を目指したいと思いました。細部にこだわるということは、自分のやりたいことをやるということじゃなくて、腑に落ちることを見極めるということなんです。今回それをやるにはベストな材料を揃えられたと思います。舞台には4本の街路灯を配置しています。いわゆる舞台美術の場合、デザイン画をつくって大道具さんにハリポテをつくってもらおうということになるかもしれないけれど、ここでは本物の使用済みの街路灯を使うことにこだわりました。私の場合、実際のゴミを取りに行くプロセス自体が白神さんの演出と繋がっていく気がしたんです。

で、その街路灯探しにいくのがすごく大変で

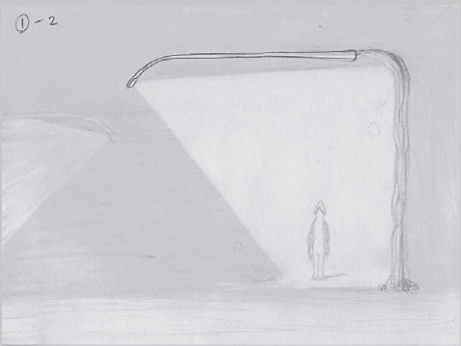
……。街路灯を交換する作業はたくさん巷で行われているんだけど、古い街路灯は切られるとすぐに鉄くず屋さんに売られて、新しい街路灯がすぐに植えられる。だから持って行かれる前の街路灯を追いかけないといけない。樹というか、林業というか、資源というか、それこそ、この作品のいけにえの再生と循環のイメージです。だから、この舞台での街路灯は、単に明かりを灯すものとして存在しているわけではありません。かつて重力に従って生えていたはずのものを違うルールで構成することによって、資源としてその存在感を出したいんです。

衣装や小道具の素材にも、使わなくなったペットボトルのラベルや、新聞紙、空き缶、廃ケーブルなどを使っています。ほかにも、舞台や客席にはトイレットペーパー、ホーンスピーカーなどを配置しています。

また、ホワイエには、舞台設定の概念模型として『アーバン・マイニング』(都市[urban]、鉱山[mine]と、大量のデータを分析する「データ・マイニング」[data mining]の意味を組み合わせた言葉が作品のタイトルです)を展示しています。ここでも都市で不要になった街路灯、廃ケーブル、空き缶約3万個を使用しました。缶の層には電気が流れていて、風などに揺れてケーブルが触れることによって、街路灯の電球やミニチュア模型のイルミネーションを光らせる仕組みになっています。都市の光の下には、私たちの想像が及ばない廃墟=都市鉱山が累々と横たわっているようなことを想像していただけたらと思います。

コミュニケーションとしてのお祭りと儀式

白神 作品の準備段階で、毛利さんやスタッフと一緒に青森の「ねぶた祭り」にハネトとして参加しました。伝統的なお祭りでも日本舞踊の先生なんかが入って洗練された動きに整えられている踊りもあるのですが、ハネトの場合は、勢いがあって、動きが単純で、ノリで入っている雰囲気がいいなと思って、その感覚を最初のシーンで使っています。一方で後半はもっと狭いコミュニティで夜な夜なひっそりで行われる儀式をイメージしています。最近佃島の「念仏踊り」や江ノ島の「ささら踊り」にも



毛利悠子による舞台美術スケッチ

接する機会があって、そういった単純な動きでじっくり踊る村の踊りからヒントを得ているかもしれません。あとは、なるべく普段やりそうな単純な動きから振付けのアイデアを引っ張ってきています。

宮内 音楽をする目的について、自己表現のためのパフォーマンスではなく、神と繋がるためとか、別の次元と繋がるためとか、調和や呼吸を合わせるためとか、そういうことを思い起こすべきだと私は思っています。発展した社会のなかではお祭りや儀式はいらぬものとして排除されつつあるけれど、やっぱり人間同士関係性を築いてコミュニティを形成するためにもお祭りや儀式は必要だし、それが表現の原点なのだと思います。だから、近未来、どんなに荒廃した世界になったとしても、生物がたとえほんの小さな息づかいであれ、何か信号を発していて、根源的なコミュニケーションは失っていない—ということを表現したいと思いました。そういう部分でも、無機質な機械であるはずなのに生き物のように動いたり、光や音を発信したりする毛利さんの作品と、「つむぎね」が発する生の声の呼応は面白いと思っています。

白神 毛利さんの作品は、物質的で機械的なのに、有機的に、新たな自然を作り出しています。そこに、もっと土臭くてプリミティブな宮内さんの「つむぎね」の声を合わせたかったんです。「つむぎね」は、楽譜に書かれた拍節ではなく、人間の息づかいが続くところまでとか、声が自然に調和するまでといったことを、ひとつのサイクルとする時間感覚で作られています。ですから、ストラヴィンスキーの作ったリズムと不協和音に対して、別の角度から

合わせられるのではないかと思ったんです。今回の『春の祭典』の中で、大自然を司っているのが毛利さんの作品だとすれば、宮内さんの「つむぎね」の声はそこにある息吹や営みだなと思います。

現代社会における「いけにえ」とは……？

白神 今回の『春の祭典』では、舞台の傾斜の奥の小高い山が、いけにえと現世の境界になっています。最終的にはみんなが山の向こう側＝「あっちの世界」に行っていけにえになってしまうのだけど、彼らが一夜で「ニュータイプ」として再生されて「こっち側」に戻ってきます。いらなくなったモノが捨てられて、ゴミ処理施設へ行って、再生されて戻ってくるというモノ＝ゴミの循環です。でも実は、山の「あっち側」は「こっち側」でもあるのかもしれない。そこは楽園かもしれないし、地獄かもしれない。近未来、人間が住まなくなった綺麗な土地に、新しい生物が住み始めて、その土地や食べ物が本当は汚染されていたとしても、生活を営んでいる生物たちはそんなことも知らず、祭りもコミュニケーションもあって仲睦まじく暮らしている—という裏表の状況を、私は舞台にしました。もしかするとそれは、近未来でもなく、今自分が生きている状況と変わらないのかもしれない。

(聞き手・構成＝渡邊未帆)

しらが・ももこ

1982年東京都生まれ。振付家、演出家、ダンサー、モモンガ・コンプレックス主宰。モモンガ・コンプレックスの全作品の構成・演出・振付のほか、音楽劇「ファンファーレ」や木ノ下歌舞伎「義経千本桜」、北九州芸術劇場演劇フェスティバルのバレードなどに演出として参加。急な坂スタジオサポートアーティスト。富士見市民文化会館キラリ☆ふじみアソシエイトアーティスト。

もうり・ゆうこ

1980年神奈川県生まれ。日用品やジャンクをマシナリーとして再構成し、磁力や重力、光、温度といった目に見えない力を感じさせるインスタレーション作品を制作。主な個展に2013年「おろち」waitingroom(東京)、2012年「サーカス」東京都現代美術館ブルームバーグ・バウリオン(東京)。東京の駅構内の水漏れの対処現場のフィールドワーク「モレモレ東京」を主宰。

みやうち・やすの

1980年神奈川県生まれ、東京育ち。作曲家、「つむぎね」主宰。楽譜を用いず、呼吸などの有機的なリズムからつくった単純なルールをもとに、響きを紡ぎ出す作品を発表。2008年トキーワンダーサイト主催「Experimental sound and art festival」最優秀賞、「Prix Ars Electronica 2008」(Austria, Linz) Honorary Mention を受賞。2011年、日本作曲家協議会主催「第6回JFC作曲賞」受賞。

第1部 大地礼賛

1. 夜の目覚め
2. 群衆の熱狂
3. 縁日と神輿
4. 神楽「イザナギとイザナミ」
5. 黄泉の人々の戯れ
6. 醜女の行列
7. 村歌舞伎「モモタロウ」
8. 見送りの踊り

*使用音源＝フランソワ＝グザヴィエ・ロト指揮 レ・シエクル「ストラヴィンスキー／春の祭典」(ACTES SUD、2013年録音)

演出・振付: 白神ももこ
美術: 毛利悠子
音楽: 宮内康乃
作曲: イーゴリ・フョードロヴィチ・ストラヴィンスキー
出演: 伊東歌織、北川結、ド・ランクザン望、乗松薫、花田雅美、浜田亜衣、原千夏、船津健太、細谷典宏、政岡由衣子、三浦健太郎、つむぎね (Arisa)、浦島晶子、大島菜央、筒井史緒、森戸麻里末)
エキストラ: 阿部紗穂里、天辰哲也、石川綾子、井上名菜、上村克仁、加藤素子、川尻雛子、鯉沼トキ、斎藤説成、櫻井晋、佐藤真紀、柴田温比古、清水由紀子、杉本朝美、鈴木匠和、相馬陽一郎、滝沢優子、武田萌絵、手塚啓行、長岩七、中谷弥生、和海アキ、馬場妙子、東ゆうこ、堀江たかこ、眞嶋木綿、三鶴泰正、宮家珠代、宮澤恵美子、村田素子、森潔、柳内佑介、山崎春美、山本啓介、夕田智恵、吉澤慎吾
音楽ドラマトウルク: 渡邊未帆
舞台監督: 坂野早織
舞台監督助手: 梶原あきら
演出部: 鈴木晴香、藤間浩也、平野遥香、馬場史子、渡邊くらら
美術製作補佐: 伊藤里織、佐々木文美、永友聖也、堀尾寛太
照明: 中山奈美
照明操作: 和田東史子
ムービングプロクラーマー: 勝本英志
音響: 星野大輔 (有会社サウンドウィーズ)
衣装: 白井梨恵 (モモンガ・コンプレックス)
衣装製作: 柴田真梨子、木下晃一、田崎倫明、山内彩湖
ホワイエ展示: 毛利悠子「アーバン・マイニング」

制作: 植松侑子
制作アシスタント: 松宮俊文
制作協力: 加藤弓奈 (急な坂スタジオ)
インターン: 岡崎由実子、神永真美、清水千奈美
フロント運営: 桜かおり
大道具: 有会社C-COM舞台装置
運搬: 株式会社マイド
協力: 急な坂スタジオ、有会社ブライト、株式会社アートコア、株式会社トベ商事、株式会社リレーム、SETENV、東豊電機株式会社、FIGURE 17-15 cas、有会社青山運送、有会社サウンドウィーズ、高津装飾美術株式会社、SYNAPSE、株式会社ギミック、株式会社クリエイティブ・アート・スィンク、ラベル回収にご協力頂いた皆様

記録写真: 片岡陽太
記録映像: 株式会社彩高堂「西池袋映像」

製作・企画・主催: フェスティバルトーカー

第2部 いけにえ

1. 丑三つ時～労働と発電
2. 村落での秘儀
3. 道しるべの模索
4. 精霊の彷徨い
5. 神頼み
6. いけにえの踊り～彼岸からの再生

Direction, Choreography: Momoko Shiraga
Stage Design: Yuko Mohri
Music: Yasuno Miyauchi
Composition: Igor Fyodorovich Stravinsky
Cast: Kaori Itoh, Yu Kitagawa, Nozomi de Lencquesaing, Kaoru Norimatsu, Masami Hanada, Ai Hamada, Chinatsu Hara, Kenta Funatsu, Takahiro Hosotani, Yuiko Masaoka, Kentaro Miura, Tsumugine (Arisa), Akiko Urahata, Nao Oshima, Fumio Tsutsui, Marimi Morito)
Extras: Sahori Abe, Tetsuya Amatatsu, Ayako Ishikawa, Nana Inoue, Katsuhito Uemura, Motoko Kato, Hinako Kawajiri, Toki Koinuma, Setsuyo Saito, Susumu Sakurai, Maki Sato, Atsuhiko Shibata, Yukiko Shimizu, Asami Sugimoto, Takumi Suzuki, Yohichiroh Sohma, Yuko Takizawa, Moe Takeda, Hiroyuki Tezuka, Nana Nagaiwa, Yayoi Nakatani, Aki Nagomi, Taeko Baba, Yuko Higashi, Takako Horie, Yu Majima, Yasumasa Mitsuru, Tamayo Miyake, Emiko Miyazawa, Motoko Murata, Kiyoshi Mori, Yusuke Yanai, Harumi Yamazaki, Keisuke Yamamoto, Chie Yuda, Shingo Yoshizawa
Music Dramaturge: Miho Watanabe
Stage Manager: Saori Banno
Assistant Stage Manager: Akira Kajiwara
Stage Assistants: Haruka Suzuki, Hiroya Touma, Haruka Hirano, Fumiko Baba, Kurara Watanabe
Stage Design Assistants: Riori Ito, Ayami Sasaki, Seiya Nagatomo, Kanta Horio
Lighting: Nami Nakayama
Lighting Operator: Toshiko Wada
Moving Light Programmer: Eishi Katsumoto
Sound: Daisuke Hoshino (Sound Weeds Inc.)
Costumes: Rie Usui (Momonga Complex)
Costume Assistants: Mariko Shibata, Kohichi Kinoshita, Tomoaki Tasaki, Ayako Yamauchi
Hallway Exhibition: Yuko Mohri "Urban Mining"

Production Co-ordination: Yuko Uematsu
Production Co-ordination Assistant: Toshifumi Matsumiya
Production Co-operation: Yumina Kato (Steep Slope Studio)
Interns: Yumiko Okazaki, Mami Kaminaga, Chinami Shimizu
Front of House: Kaori Sakura
Props: c-com stage setting Co., Ltd
Transportation: Maido Co., Ltd
In co-operation with Steep Slope Studio, Bright, ART CORE, Tobe Shoji Co., Ltd., Re-Tem Corporation, SETENV, Touei Denki, HIGURE 17-15 cas, AOYAMA UNSOU Inc., Sound Weeds Inc., TAKATSU Co., Ltd., SYNAPSE, GIMMICK Co., Ltd., CREATIVE ART THINK Co., Ltd., everyone who helped collect the labels

Photography: Yohta Kataoka
Video Documentation: SAIKOU DO Co., Ltd.

Co-produced, planned and presented by Festival/Tokyo

The performance of this work is licensed by Schott Music Co. Ltd., Tokyo on behalf of Boosey & Hawkes Music Publishers Ltd., London